



KOTONONE
Series of Stories
vol.13

シリーズ 障害者の就労事例 13

JAおきなわの星

その苦しみを、周囲に理解してもらいにくい。
津波古広樹さんは、三〇代のはじめに発症し、
一〇年以上、病と闘ってきた。

統合失調症は、目に見えない、わかりにくい障害だ。
本人の苦しみも大きい。
彼が働く実感を得て、職場で輝くためには、
周囲と「つながる」ことが必要だった。

誰よりも大きな声で、
お客さんを呼び込む

「とあいらつしゃい、いらつしゃい！」。大きな声をあげながら、次々と野菜を並べていく。顔は上を向き、店内のお客さんの様子を見ながら、しかし手は休まることがない。ときどき「どれがおいしいのかしら」と話しかけるお客さんに応える。「こは」JAおきなわ宜野湾ファーマーズマーケットは「ころも市場」。宜野湾市内、国道五八線を海側に少し入ったところにある、野菜の直売所だ。店长（取材時）の兼城次男さんは「農家さんが自由に値段をつけられるのがいちばんの特徴。市場では手に入りにくい珍しい野菜を、手ごろな値段で買うことができます」。取材した三月は、県産野菜のピーク。売り場にはたくさん

野菜のピーク。売り場にはたくさん

菜が並んでいる。中には見たこともない野菜も少なくない。ここで働いているのが、津波古広樹さん。先ほどの大きな声の主だ。その働きぶりからは、津波古さんが統合失調症という病を抱えていると想像できる人は、多くないだろう。

突然、幻覚と
妄想に襲われた

津波古さんが統合失調症を発症したのは、いまからおよそ一〇年前、三二歳のときのこと。ポルト工場働いて九年目、その一年前には結婚、長男も生まれたばかり。いきなり、幻覚と妄想に襲われた。発症のときは「自分でも、何が起きているのか、わからない」ほど、突然で、激しいものだった。その当時、確かに、気分は沈んでいた。「うつみたい

編集部=文
text by Kotonone
岸本 剛=写真
photograph by Tsuyoshi Kishimoto



働ける自分が好きです。
前は働くことが
できなかったんですから
津波古広樹さん(JAおきなわ)